

P箱の歴史

1965年(昭和40年)に麒麟ビールがビール大びん用流通箱としてのプラスチック製の箱(以下「P箱」という。)を採用したのを先駆けとし、その後、各種飲料、食品および各種産業と幅広い分野で、用途に応じて各種P箱が大変な勢いで開発採用されました。

日本酒1.8ℓびん用木箱のP箱化については、1971年(昭和46年)、商社、成型メーカー、原料メーカー、酒類関連業者が大同団結して「SC(酒コンテナ)会」を結成し、1972年(昭和47年)から1973年(昭和48年)初めにかけて、商社、酒類卸社が中心となり折衝を

重ねた結果、全国びん商連合会の協力体制を得て、P箱の回収機構組織化の目途がたちP箱レンタルと回収を行う新会社(新日本流通株式会社)が1973年(昭和48年)に設立されました。(フーズコンテナ社、宝永エコナ社がその数年後「レンタルP箱」の運営会社として設立されている。)従来「10本入り木箱」が流通されている近畿地区より順次「6本入りプラスチック箱」へと荷姿が変更され1994年(平成6年)には北海道まで拡大し、沖縄県を除く国内全域にレンタルP箱システムが構築するに至っています。

P箱の役割

リユースびんの流通には、リユースびん製品の出荷から消費後に発生した大量の空きびんを傷つかないように保護して回収するためにはP箱が不可欠です。回収された1.8ℓびんはP箱に収められた状態で初めて「商

品」としての価値を持ちます。言い換えると、P箱に入らない「バラびん」の状態では、再使用のルートに乗らないのです。

P箱の流通システム

P箱が登場する前は、1.8ℓびんの流通・運搬用には「木箱」が使用されていました。灘・伏見などの大手酒造メーカーが新しい木箱を作って新びんを入れて出荷し、びん商が回収してびんとともに木箱をリユースしていました。1973年(昭和48年)に6本入りのプラスチック箱(P箱)が開発され、レンタル事業が開始されました。

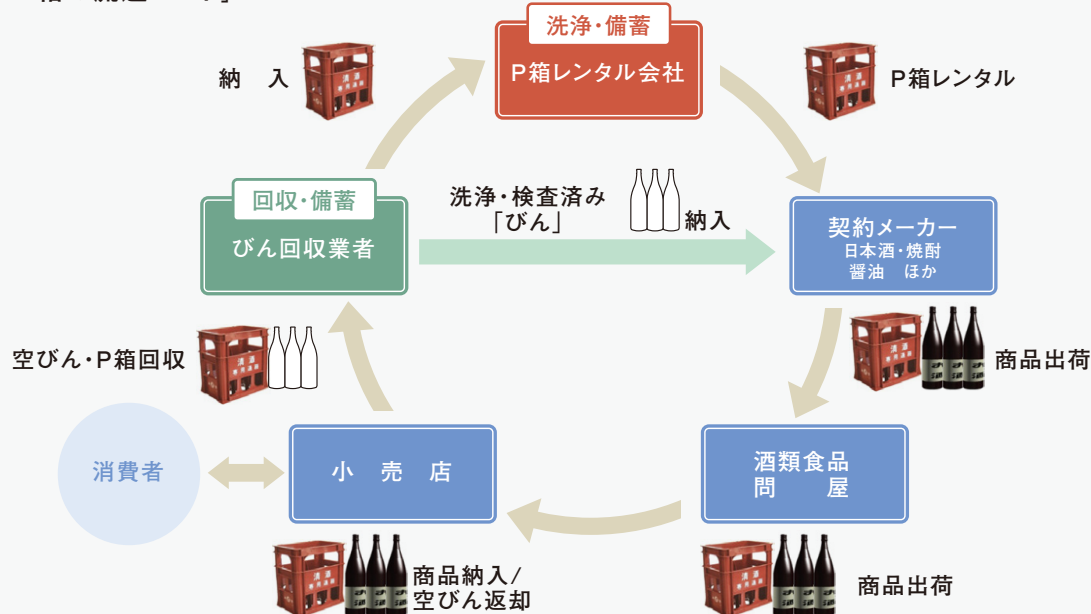
P箱はレンタル会社が保有しており、ボトラーからレンタル料を徴収して運営されています。

・P箱レンタル協議会(P箱レンタル会社3社が加盟)の連絡先
TEL:0798-24-0307 FAX:0798-23-7038

COLUMN

P箱レンタル会社は、新日本流通(株)、(株)フーズコンテナ、(株)宝永エコナの3社があります。レンタルP箱以外に、九州地域のみで流通する九州P箱や、県単位の酒造組合が管理するP箱(県P)や蔵元独自が所有するP箱があります。県Pは県内流通に使われ、レンタルP箱は域外出荷用として使われています。

[レンタルP箱の流通ルート]



出典：新日本流通（株）作成資料より

P箱不足問題

1.8ℓびんは中身の入った製品段階からP箱に入れて出荷し、P箱に入ったままの状態では酒販店まで流通してきました。このため、酒販店には空きP箱が残り、酒販店に返却された空きびんはP箱に詰めてびん商が回収することができていました。しかし最近では酒造メーカーから段ボールで出荷されることが多くなり、空きびんの発

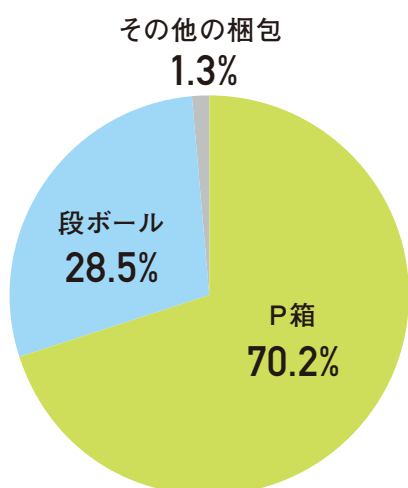
生量と空きP箱数のミスマッチが生じ、現場ではP箱が不足し、1.8ℓびんの回収に支障が出てきています。P箱不足の要因には、酒造メーカーが製品在庫にP箱が使用していることなども指摘されており、P箱レンタル業者は必ずしも絶対量が不足しているわけではないとしています。

P箱以外の流通

酒販店では置き場所を取らない理由からダンボールを好むところも多く、ダンボール出荷が増えています。酒造メーカーへのアンケート調査では、ダンボールでの出荷が30%近くに達しているという実態が明らかになりました。

また、インターネットを利用した通販も増加しており、様々な銘柄でダンボールの大きさも異なる出荷が増えています。その結果、簡易なバルク包装での出荷も増加しています。

[P箱とダンボールの使用割合]



[バルク包装]

